ご講演へのコメント
ーClayton先生に教えていただきたいことー

東洋大学・社会学部　堀毛一也

今日のご講義の基本的関心

- コメンテーターとしての基本的立場
  - 非常に幅広く豊かな内容のお話
  - コメントをつける力量はないので→
  - 自分の研究について話をしながら今日のお話と関連づけて、先生のコメントをいただければと考える
- 今日のご講義の基本的関心
  - 自然保護的な態度をいかに育てるか
  - そのために心理学がどのような貢献ができるか→個人の環境アイデンティティが重要
  - 強く同意する

堀毛の個人的な関心

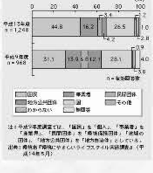
- 前の大学で理科系を中心とするサスティナビリティ研究・教育の提唱
- 個人差が考慮されていない
- 心理学的視点の欠落
- 自然・環境保護活動への関与の低さを改善できないか
- ポジティブ心理学的介入の可能性を検討する
- 2010～2014の科研費:「ポジティブ心理学を背景としたサスティナブルな心性の発見・促進ツールの開発」

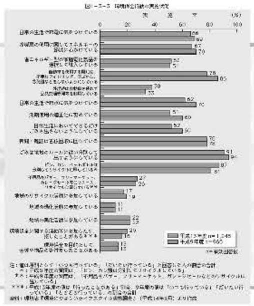
Psychological study for sustainability

- Several studies insist on the importance of the role of psychology in the research of sustainability .
  - 1)Gifford(2007) : Environmental psychology has expanded from the proximate level,…to the serious consideration of sustainability at larger levels of analysis.
  - 2)Kazdin(2009) : Fostering environmentally sustainable behavior is clearly a wicked problem.
  - 3)Clayton & Myers(2009) : Conservation psychology. Chapter 9. Promoting sustainable behavior.

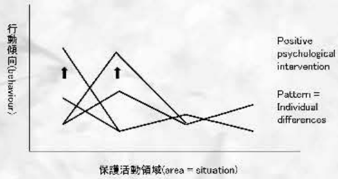
環境白書(2013)

- 持続可能な社会の構築に向けた一人ひとりの取組の重要性
- 環境問題に対する意識と行動の隔たり
- 持続可能な社会を目指した環境教育・環境学習(2010)
  - 人材育成、プログラム整備
  - 情報提供、場や機会の拡大
- 心理学的視点の欠落
- コミュニティ・ベースのアプローチの欠落





行動指紋（behavioral signature）



個人差に着目したアプローチ

- 行動の個人差のパターン化（行動指紋）
- 環境アイデンティティの個人差を把握することは可能か？そうした試みを行っておられるか？
- よいところを伸ばすポジティブ心理学的介入
- すべての環境領域について行動傾向を高めようとするよりも、強みのある領域を強化することから始め全体に効果を波及させる
- こうした視点は、環境アイデンティティ研究・教育でも可能か？また、足りないところを補うという方法とどちらが効果的とお考えか？

サスティナブルな心性

- サスティナビリティへの関心を測定する尺度を開発
  - サスティナブル心性尺度（sustainable mind scale）
- 改訂版の妥当性を検証
  - 向環境態度尺度（Milfont,2010)revised pro−environmental attitude scale
- 2次因子分析の結果→両者は区別される
- 心性尺度と、環境アイデンティティとの関連を検討してみたい。内容的な重なりについてどうお考えか

サスティナブル心性尺度の因子分析結果（1）

- 第1因子：**世代継承性**（α=.85)generativity
  - 年長者の経験してきた話を聞くことは次世代の育成にとって重要だ(.84)
  - 自分の経験してきたことを次の世代に伝えることは重要だ(.81)、など7項目
- 第2因子：**持続的環境への関心**（α=.86)interests in susutainable environment
  - 自然環境を保護することが次世代の繁栄につながる(.89)
  - 消費を節約することが現在や将来のよい社会の持続につながる(.69)、など8項目
- 第3因子：**生物多様性への関心**（α=.83)interests in biodiversity
  - いろいろな種類の生き物を大切にすべきだ(.84)
  - 人間に害をなす生き物であっても種の保存は大切だ(.78)、など4項目
- 第4因子：**判断の公正性**（α=.76)fairness on judgment
  - 環境問題に対する葛藤を解決するには公正な視点が重要だ(.92)
  - 環境問題に対応するにはそれぞれの主張に寛容な姿勢をもつことが重要だ(.51)、など4項目
- 第5因子：**環境親和感**（α=.65)affinity to enviroment
  - 自分は大きな環境の一部だという意識をしばしば感じることがある(.54)
  - 植物や草木に触れると緑を大切にという気持になる(.53)、など3項目

サスティナブル心性尺度の因子分析結果（2）

- 第6因子：**環境問題解決への関心**（α=.81)interests in the resolution of environmental problems
  - 環境問題を解決できる技術をもっと開発すべきだ(.75)
  - 環境問題の解決にはいろいろな分野の協力が必要だ(.64)、など5項目
- 第7因子：**環境問題への否定的態度**（α=.64)negativi attitude toward environmental problems
  - 環境について考えると自分のしたいことが何もできなくなる(.72)
  - 環境問題は複雑なのであまり考える気にならない(.66)、など4項目
- 第8因子：sustainable well-being（α=.78)
  - 環境や将来の世代に負担をかけずに幸福を追求することは重要だ(.97)
  - 次世代のニーズを危うくしないことを心がけながら自世代のニーズを解決する必要がある(.68) （2項目）
- 第9因子：**社会的多様性への関心**（α=.79)affinity to social diversity
  - いろいろな民族の人たちと交流することが将来の社会の発展につながる(.55)
  - さまざまな社会階層の人たちとの交流を楽しむことが将来にとって重要だ(.49) （2項目）
- 最尤法・プロマックス回転、Σ％＝65.7％

サスティナブル心性尺度と向環境態度尺度の2次因子分析結果

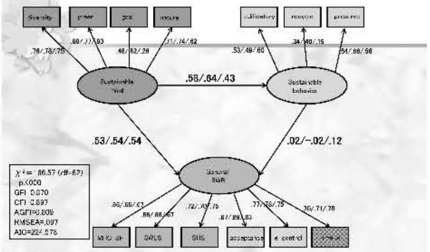
	因子				
	1	2	3	4	5
世代継承性	.622	.207	.151	.076	-.312
持続的環境への関心	.361	.015	.556	-.068	.070
生物多様性への関心	.535	.206	-.047	-.098	-.026
判断の公正性	.839	-.054	-.137	.012	.197
環境親和感	.253	.649	-.094	.020	.041
問題解決への関心	.663	.031	.133	-.027	.229
否定的態度	-.103	.077	.158	-.377	-.095
サスティナブル消費	.016	.115	.843	.002	.009
社会的多様性への関心	.738	.065	.011	.159	-.157
自然親和感	.057	.618	-.058	-.079	-.162
環境保護活動	.123	.650	-.158	.123	.129
人間中心環境利用	.153	.141	-.049	.549	.060
環境保護信念	.242	-.265	.162	.375	.087
科学信奉性	.157	.244	-.003	-.138	.203
個人消費抑制	-.188	.610	.378	.023	.061
人間優位性	-.291	.101	.062	.776	.064
自然資源利用	-.062	.273	.175	-.204	.099
人口抑制	.041	.048	.029	.140	.508

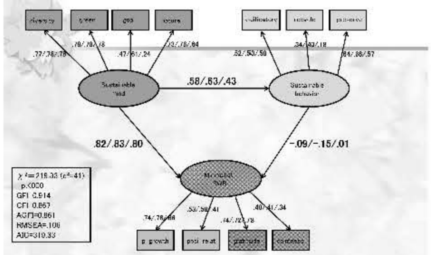
Higher-order factor analysis

・心性尺度と向環境尺度はおおむね異なる因子を構成する（弁別的妥当性）
・環境親和感は向環境尺度の自然親和感や環境保護活動と関連を有する（併存的妥当性）
・環境に対する否定的態度と反向環境的態度にも関連がみられる（併存的妥当性）

Well-beingとの関連と文化差

- 自然とwell-beingの関連について触れられた
- 環境的アイデンティティ等との関連について、実証的データをおもちであれば簡単に教えていただきたい
- お話を伺っていて感じた文化差
  - 日本ではコミュニティ活動への参加が非常に少ない
  - 政党への親和性が低い
  - 自然との一体感・親和感は強いが、「自己意識」が関与しているかどうかわからない
- Well-beingの指標の文化差





Contact info : Kazuya Horike (Dept. Sociology, Toyo Univ. JAPAN)
5-28-20 Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8606 e-mail : kakehori@toyo.jp

文化をこえた共通点

- 動物への親和感
  - 日本でも介入研究は可能
  - 動物介在療法への関心
- 環境アイデンティティの存在
  - 4つの側面はさまざまな文化に共通する
- 環境アイデンティティがリジリエンスにつながる
  - コミュニティ・リジリエンスの重要性
- コミュニティを単位とする研究の必要性

コミュニティ・リジリエンス

- コミュニティがもつ精神的予防・回復・成長機能
- Murray & Zautra(2012)：3つの機能
  - 1）逆境後の回復機能
    - セイフティ・ネットの不公平さの回復、適切な食事や栄養・運動などの阻害の回復など
  - 2）逆境に屈しないサスティナビリティ
    - 民主的な参加、協力行動、アイデンティティの共有などの維持
  - 3）逆境後の成長
    - 目的の共有、エンパワメント、集合知、リーダーシップ

コミュニティ・リジリエンスの3つの機能（Murray & Zautra,2012）

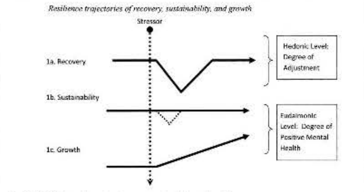


Fig. 26.1 Resilience trajectories of recovery, sustainability, and growth

社会関係資本の例

- Poortinga(2012)
  - 「絆(bonding)資本」
    - 信頼や協調的関係の強さを示す
    - 近隣の団結や信頼、所属感、地域活動への参加
  - 「繋ぎ(bridging)資本」
    - 異なる背景をもつ人同士の尊重や相互依存関係の強さ
    - 集団の団結、相互尊重、社会経済的地位の類似性や民族的な類似性の認識
  - 「連結(linking)資本」、
    - 政治参加や規範尊重の程度
    - 共行動や集会への参加、近隣社会への影響力、国会や地方議会、警察への信頼感
- それぞれが、近隣からの疎外感や自己報告による精神的健康感と密接な関連をもつ

- ご講演ありがとうございました